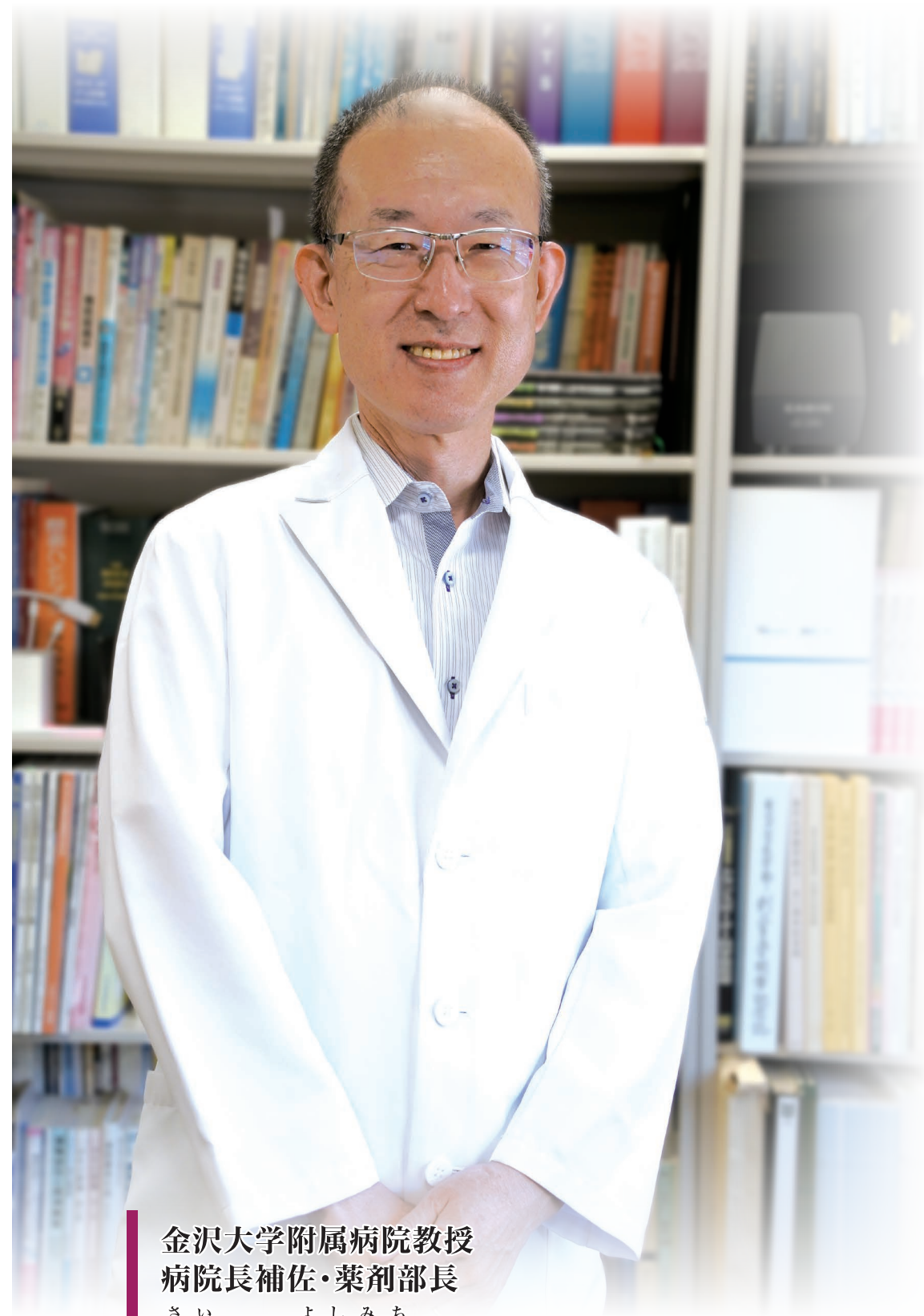


地域医療を変える薬剤師 日本中で通用するプロを育成



金沢大学附属病院教授
病院長補佐・薬剤部長

さい よしみち
崔 吉道氏

1989年 金沢大学薬学部卒業
1994年 金沢大学大学院修了 博士(薬学)
1994年 金沢大学助手
1997年 米国タフツ大学医学部ポスドクトラルフェロー

2004年 共立薬科大学助教授
2008年 慶應義塾大学准教授
2009年 金沢大学准教授
2014年 金沢大学教授

2040年問題、中小病院の人材不足に対し、未来の医療、地域の医療に薬剤師はどう対処していくのか。金沢大学附属病院教授・薬剤部長の崔吉道氏に、全国的にも注目されている人材育成モデル「KUPS」についてうかがいます。

薬剤の安定供給から 副作用の管理まで

本院薬剤部の役割は、院内の薬剤の安定供給を担うことです。さまざまな情報を患者さんの背景に応じた駆使し、安全性を担保しています。

薬物は症状の治癒や緩和を期して使われますが、身体の外から投与される薬物は本来、ヒトにとって異物であり、症状の悪化などの障害を来すこともあります。高度急性期医療においては5人中1人に有害事象が起こるという報告も上がっています。

副作用が許容範囲であれば良いのですが、許容能には個人差があります。たとえば、総合感冒薬には抗ヒスタミン薬が含まれており、眠気を誘起します。養生をするに



公立宇出津総合病院に向向している薬剤師から報告を受ける

は好都合ですが、運転手や機械の操縦者においては事故に繋がりがかねません。

抗がん剤にはさまざまな選択肢があり、薬剤の組み合わせにより副作用は異なります。自覚しやすいものに倦怠感や強い吐き気、手足のしびれがありますが、中には骨髄

大学病院だけでなく 地域の病院でも役立つ人材

高齢者人口がピークとなる2040年に向け、大学病院は回復期や慢性期を診る中小病院との連携を密にしなければなりません。しかし、医療資源は高度急性期病院に集中しており、その再分配が求められます。

本院には、がんや感染症などの専門資格を持つ薬剤師が揃っています。ですが、専門にこだわらず、幅広い疾患に対応できるスキルを

身につけるべきだと私は考えています。2017年、金沢大学附属病院の創立150周年を機に、地域のリーダーとなる人材を育てる「金沢大学薬剤部スタンダード(KUPS)」を打ち立てました。5年間のプログラムで、前半の2年間では基礎を修得し、4つの診療科の病棟をローテーションします。後半の3年間では病棟担当薬剤師となり、認定資格の取得や課題研究を行い、能登の中小病院に向向します。地域医療を理解し経験すること、どこへいっても活躍できる薬剤師を輩出したい。

私は本学薬学部から大学院に進み、辻彰先生(細胞膜の物質輸送担体に関する研究者として世界的に高名)のもとで、薬物動態学(薬剤が体内でどのように吸収され、標的とする細胞に届くかを研究する)に取り組みました。当時、「こんな素晴らしい仕事は、ほかにはない」と開眼したものです。それが私の原点かもしれません。